

大賞

ラストラン！

シカマ サユキ

「おじいちゃん、がんばれー」

「よしおちゃん、ふぁいとー」

「しげじい、まけとつたらあかん」

天王川公園には「スタート」と書かれた横断幕が掲げられ、その周辺には老若男女大勢の人が詰めかけ、応援する叫び声が飛び交っていた。

「おじいちゃん」と叫ぶ小さい子供の元気の良い甲高い声の中に、渋いしゃがれた声で「まけとつたらあかん」と叫ぶ声も聞こえる。時折「ふぁいとー」とか「あなたー」とか色っぽい黄色い声も混じっている。

その声援の先にはスタートラインに並んだ男達がいた。それぞれが自慢の愛車と寄り添いながら、派手なスポーツウエアに身をまといだかりに向かって手を振る者がいたり、カッコいいつなぎを着て腕や足を動かして準備運動している者もいる。応援する者もスタートラインに立つ者も、いろいろな思いを抱きながら、今か今かとスタートの号砲を待っていた……。

ことの始まりはバイク好きのしげじいが発した一言だった。

しげじいは若い頃から何よりもバイクを愛して休みとなればツーリングに出かけ、暇さえあれば愛車をぴかぴかに磨く自他共に認めるバイク男だった。

「免許返上してバイクをやめるわ」

突然言い出してみんなを驚かせたのは、いつもの商店街の間が居酒屋に集まって盛り上がっていたときのことだった。現役バリバリの大工でもあるしげじいは、一週間ほど前に木材を担ぎ上げたとき、腰を痛めてしまい弱気になっているという話をしていううちに、酔った勢いで宣言したのだ。

それを聞いた新聞配達店のよしおちゃんがすかさず突っ込んできた。それも必死に早口でまくし立てた。

「えっ、しげじいっ。ほんまか。バイク仲間がおらんくなったら、つまらんがね。撤回してちよっつ。まーかん。わしや、許さん！」

よしおちゃんは、現役の新新聞配達員でもあり、毎朝バイクに

またがっている。それに商店街を二人で並走して走って不良老人と言われることを口癖のように自慢していたくらいだ。

その二人のやり取りを見ていた酒店を営むコウジンも、元カメラ屋のまささんも一緒になって、もう少し考えた方がいいよとしげじいを説得するも、もう無理だとか、今が引き際だとか言って聞く耳を持たない。

それに従い楽しい酒の席が段々と沈んだ暗い雰囲気になっていった。年を取るついでやだねえ、とか、体の節々が痛いだの陰気くさい話がオンパレードになっていったのだ。

そんな時だった。足を悪くして車椅子生活を余儀なくされている元銀行員のミッチーが良いことを思いついたんだけど、と威勢のいい前置きをして話しはじめた。

「あのよお、最後にオートレース開かん？ ほら、若い頃、天王川公園でやつとつたるー、あれよ。この際だからしげじいとよしおちゃんとひと勝負するっていうのはどう思う？」

大正十五年から昭和四十二年まで天王川公園の池の周りをコースにオートレースが行われていたのだ。エンジン音を轟かせ、砂煙を上げて走り抜けるオートバイ。歓声に包まれながら輝いていたライダーたち。若い頃にたびたび開催されていたあのオートレースを憧れの眼差しで沿道で応援していた事を思い出したのだ。

突然の名案に目が点になって黙り込んでいたよしおちゃんも

コウジンもまささんも、それぞれに同時に当時の思い出が蘇ると一斉に話し出した。

「あーそうそう、かっこよかったわ。懐かしいでかんわ」

「あれ見て、バイク欲しなつたけど、いろいろあつてあかんかつたがね」

「毎回楽しみにしとつたのに。あのでら速い選手、何て人だつたっけなあ」

それぞれが勝手に思う存分喋りただけ喋ると、誰からともなく「やるまい、絶対開こまい」と言い出し、一致団結しはじめた。さらに「いつやるん」と聞く事を前提にして話がとんとん拍子に進んでいく。

「あかんわ、二台しかありやせんもん。格好つかんわ」

皆が大騒ぎする間も黙っていたしげじいは盛り上がっている所に釘を刺すように、ぼつりとそう言った。確かに二台だけでレースって言うのも盛り上がりには欠けそうだ。誰かバイクに乗っている人を知らないかとなったが、思いつくのは若いものばかりでそれはそれでレースにならなさそうだ。

「じゃあよ、おれ、車椅子で走るわ！」

ミッチーは授業中の小学生のように右手を真っ直ぐ上げてそう宣言した。車椅子歴二十年のベテランだし、以前やっていたテニスの競技用車椅子を持つて、かなりスピードも出るから勝負してみたいという。

「そんなもんレースにならんわ」

「そんな事ないわ、バイクにも負けんて」

「危いやあよ、転んだらどうすん、年寄りばっかや」

「これで死ぬるなら本望やん」

話はこちらに変な方向へどんどんと向かっていく。それぞれが勝手な事を言い合っていると、しばらく黙っていたしげじいだったが、またボツリと言いだした。

「じやあよ、ハンディつけたるで、どうなん」

「何言つとんの」

「だからよ、バイクは三周、車椅子は一周、つて言つとんだわ」

「しげじい、あつたまええなあ。それでええやん」

だんだんと羨ましくなってきたまささんもコウジンもいてもたつてもいられなくなつた。

「じやあ、オレも出るわ。孫に自転車でも借りてよ」

「そんならわしも。娘の電動アシストで出たるわ」

「ずるいがね、電気で動くやつはあかん、反則だがね」

「ちよー待つてよ、オートレースつちゆうのは、自動つてことだしよ、そんなら反則じゃないがね」

話してんでばらばらの状態でこの日は終わつた。さすがに言いたいことを言うだけの年寄り同士ではこれ以上の話し合いは無理だつた。

一週間ほどが過ぎてからまたいつものメンバーは酒を飲むために集つた。全員揃いも揃つてオートレースの話を進めたくてうずうずして一週間の過ごし方を、と知るとお互い笑いあつた。さらに噂を聞きつけた元警察官のケイジと行きつけのスナックのママのアイコも加わつた。一週間のそれぞれのアイデアを持ち寄り、最初から具体的な話が繰り広げられていったのだ。「乗り物はよ、バイクでも車椅子でも自転車でもかまわんがね。しげじいの言うようにハンディ付けたりやええがね」

「スピードを競うつて言うのは、危ないがね。バイクでこけたりぶつかつてみ、元もこうもないわ。予想タイムを決めといて一番近い人が優勝とか、つてのはどおなん？」

「いや競争じゃなくてもええわ、みんなでいっぺんにゴールでもおもしろいがね」

「でもよ、やつぱり命懸けてでも勝負したほうがええ、絶対その方がええつて」

しげじいも、よしおちゃんも、コウジンも、まささんも、ミツチーも真剣だ。前向きな意見がどんどんと出てくる。

「レースつてことはさあ、レースクイーンがおらなあかんよね？」

ニコニコしながら話を聞いていたアイコが、茶化すように色つぽく口を挟んできた。若い子限定でお願いねとミツチーに言われるとふてくされた表情をした。

「おい、それより安全は大事やと思うんだわ。年が年だし、無茶なことすると警察の許可が下りんがね」

しかし、さすがはケイジだ。ツボを得た意見だ。一番の問題は、警察の許可が下りるかなのだ。この意見には皆が納得して、安全第一を念頭において計画を進めようということになった。

それからというものの実現へ向けての話し合いは何度も行われた。噂はどんどんと広がり、話し合いに参加する人もどんどんと増えていった。いろいろな意見が飛び出してきて、それをしげじいとよしおちゃんの不良老人組と、しっかりもののミッチー、警察につながりのあるケイジが取りまとめて進められていったのだった。

半年ほどが過ぎ、話し合いは大詰めを迎えていた。

警察とケイジとの話し合いでやはり安全性が指摘され、スピードの出る乗り物は制限速度を設ける事、接触しないように監視員を配置する事などを前提に許可が下りた。

それを基にしげじいとよしおちゃんは、参加する選手を募集しながら制限速度とハンデイを設定したり、危険行為などのルール作りや、走行するルートの整備や確認、配置する監視員の確保などで奔走した。

残りのメンバーもオートレース開催の告知や、スポンサーになつてくれる会社を募集、当日に出店してくれるお店を集めたりしながら、全員一丸となってオートレース開催日を迎えたの

だった。

「第一コース、よしおちゃん選手、七十五歳、バイクで丸池三周」

マイクを持ったケイジが、プロレスのリングアナウンサーを真似て威勢のいい選手紹介をはじめると、集まった大勢の観客は一気に歓声を上げた。がんばれーの声援があちこちから聞こえ、ヒューヒューと指笛も響いている。

よしおちゃんは、新聞配達用のバイクに左手を掛け、右手を大きく振っている。配達用で背中に名古屋新聞と大きく書かれたジャケットを羽織り、ジーンズという地味な出で立ちながら足元だけはこの日のために買ったという皮のブーツが異様に輝いていた。

「第二コース、ミッチー選手、七十四歳、車椅子で丸池一周」

再び歓声が上がった。車椅子で大丈夫なのかという心配の声があちこちから聞こえてくる。ミッチーは派手なスポーツウェアに身をまとい車椅子に乗ったまま、ガッツポーズをして車椅子生活で鍛えたのだという腕の力こぶを見せつけた。

こうして次々に選手紹介が続けられた。

全部で七コース。バイクが三台、自転車三台、車椅子が一台出場。全員七十代。それぞれが堂々とスタートラインに自慢の愛車とともに並んでいる。紹介されると選手はポーズを決め、

その度に拍手が鳴り歓声が上がった。まささんはやはり孫から借りた自転車で出場し、コウジンは娘から借りた電動アシスト付き自転車での出場だ。日々自転車に乗り練習をつんできたらしい。それから、ミッチーの昔のテニス仲間の吉田さんが原付きのバイクで、アイコのお店の常連客の佐藤さんが自転車で出場だと紹介された。どの選手も自信たっぷり笑顔で手を振っていた。

六コースの紹介が終わると、観客は最後の一人、第七コースに立つ最後の選手に視線が集まっていた。紹介前だと言うのに観客からは、次々に歓声が上がりはじめている。

しげじいだ。トレードマークのライダースーツに身をまとい、傍らには、この日のために磨き上げたピカピカの愛車のバイクが堂々と寄り添い、やはり他の選手を寄せ付けないオーラが漂っていた。

「第七コース、しげじい選手、七十八歳、バイクで丸池三周」ケイジの威勢のいいアナウンスが響き渡ると、大歓声が沸き起こった。今日一番の盛り上がりだ。まるで大スターがその場に居るかのような異様な雰囲気包まれはじめたのだ。

しげじいは、あまりの盛大な声援に少し恥ずかしそうに手を振り答えている。止まぬ歓声に何度も頭を下げて手を振り続けた。

そして、ケイジはスタンバイの合図を送ると、それぞれの選

手はバイクにまたがったり、ヘルメットを被ったり準備を始めた。そしてケイジがコースの外れに置かれたスタート合図用の四角い台の上にあがると同時に、三台のバイクはエンジン音を響かせた。

いよいよスタートだ。観客は固唾を呑んでスタートラインを見つめている。そして視線の先のどの選手も真剣な眼差しでコースの先を睨んでいた。昔見たあのオートレースを思い出しているのだろうか。あの時見た憧れのライダーになりきっているのだろうか。きつと一番でゴールすることを思い描いているのではないだろうか。

その時、ケイジの手にしていた赤い旗が、真っ直ぐ水平にかざされた。そして数秒の沈黙のあと、号砲が鳴り響き勢いよく旗は振り上げられた！

スタートだ！

バイク三台が勢いよく飛び出した。エンジン音が響き砂煙があがり、同時に観客も一斉にそれぞれの応援する選手の名前を叫んでいる。少し遅れて自転車三台が追いかける。自転車に慣れていないらしい佐藤さんはフラフラと早くもコースから外れ始めていて監視員から注意を受けている。自転車に続いて車椅子のミッチーが一番遅い滑り出しであったが、力強く順調に真っ直ぐコースを走りはじめた。

天王川公園の丸池は一周で八百メートル。その丸池の周囲を

バイクは三周、自転車は二周、車椅子は一周してスタートラインに戻るとゴールとなる。

先頭集団のバイクは制限速度は二十キロと決められているのでなかなか差がつかず、三台とも並走したまま走り続けていた。そして状況は変わらず並走しながらバイクはあつという間に二周目に突入した。観客の目の前を過ぎてゆく三台のバイクに歓声が上がった。

半周ほど遅れて自転車も二周目に入りはじめる。最初に通りに過ぎたのは電動アシスト付きで出場のコウジンだった。観客に向かつて余裕で手を振っている。さすがに疲れも見せず涼しい顔で通り過ぎていった。少し間隔が開いてはいたが、安定した走りを取り戻した二台の自転車がほぼ同時に通りすぎた。

ちようどその頃、トップ集団のバイクに異変が起きた。一番大きなカーブの箇所で吉田さんの原付きのバイクが軽くスピンし、それに驚いた吉田さんはブレーキをかけて止まったのだ。接触事故でも起きたのかと観客からはワツと悲鳴が上がった。監視員が走ってバイクに近づいていき、二人の間でやり取りがあり間もなくバイクは走り出したところを見ると、バイクも選手も大丈夫らしい。このことで先頭は二台のバイクの争いとなった。

一方、車椅子のミッチーは、滑り出しこそ順調であったが、苦戦を強いられていた。路面が走りづらく思いのほかスピード

が出ないのだ。スピードをあげようとすればするほど体力も奪われるらしく、一気にスピードを落とし疲れも隠せない状況になつていた。

バイク二台の並走は続いていた。しげじいとよしおちゃんとともに現役のライダーでもあり商店街の中を走り抜けるバイク仲間でもあるだけにお互いに譲れないデッドヒートを繰り返していた。そしてそのままの状態ですタートラインを越えて三周目に突入したのだ。観客の歓声もヒートアップして悲鳴にすら聞こえる。残り一周だ。

それに続くのは、電動アシスト付きのコウジンだ。二台の自転車を大きく突き放し順調に走り抜けている。自転車は二周でゴールとなるので、一台の自転車を追いかける二台のバイクという構図となつていた。

先頭を走るように見える電動アシスト付きのコウジン。時折確認するように後方を振り返っている。並走したバイクは砂煙を上げながら追いかけるように距離を縮めていく。

ゴール前に押し寄せている観客は、丸池をはさんだ向こう側で練り広げられているレースを歓声を上げながら応援していた。そして最終コーナーにさしかかる頃には、電動アシスト付きのすぐ後方にバイク二台が追いかける状況までになり、レースの行方がわからなくなつてきた。

「しげじい、いけー」

「コウジン、あとすこしだぞー」

「がんばってねえ、よしおちゃん」

いよいよゴール目前とあつて大盛り上がりだ。キャーキャーと絶叫に似た悲鳴が聞こえる。誰が一着になつても不思議ではない状況になつてゐる。エンジン音がどんどんと近づいてきてゐる。どう見ても三台は並んでゐる。同時ゴールかあ！

その時だつた。しげじいは狙いを定めてアクセルをふかすと一瞬にして加速し、バイク一台分抜き出るとそのまま大歓声で迎えられながらゴールした！

優勝はしげじい、二位は僅差でよしおちゃん、三位はコウジン。しげじいの見事な作戦勝ちだつた。

「優勝は、しげじい」

表彰式が行われ、ケイジの叫ぶようなアナウンスに観客は湧きに湧いた。しげじいは小走りで駆け寄り表彰台に立つと、両手を上げて声援に応えた。そこへきれいに着飾つたアイコが花束とメダルを手に現れて笑みを浮かべてしげじいに近づいていく。

しげじいは照れくさそうに花束を受け取ると、首をそつと下げた。アイコはメダルをしげじいの首にゆつくりと掛け、一瞬の隙を突いて軽く頬にキスをする、観客はさらに湧いた。

「しげじい、よつ、日本一」

「引退撤回しなかんわ、しげじい」

飛び交う声援を受けながら、しげじいは花束を手に、メダルを胸に嬉しそうな笑顔を右に左にと観客に振りまいていた。

「ではー、しげじい選手から優勝と引退のメッセージですー」
ケイジはそう叫ぶと、しげじいの前にスタンドマイクを立てた。恥ずかしそうにしげじいはマイクに近づいた。

「ありがとうございます」

しげじいはそう言つて一礼すると声援を送つていた観客は、声を聞こうと一気に静まり返つた。

「えーつ、わたくしはーつ、本日をもって免許を返上いたしましたがつ、オートバイは永久に不滅ですつ！」

しげじいの声は公園に響き渡つた。

しげじいと同じ名前でもある憧れの野球選手のセレモニーを真似して言い切ると、一緒に走つた選手がしげじいの側に集まつてきた。再び飛び交う声援を受けながら、一列に並んだ選手たちは手を振り続けた。

みんな満面の笑みを浮かべそれはもう幸せそうだった。

（了）